

諸橋轍次著「論語の講義」大修館書店、1973年9月10日刊を読む

論語の講義

1. 6つの徳目——「仁」・「知」・「信」・「直」・「勇」・「剛」——のバランスのとれた生き方を
- (1) 孔子が子路の名を呼んで、由よ、汝は仁・知・信・直・勇・剛の六つの徳目にも、それぞれ学を好まないために生ずる六つの弊害があるという説を聞いたことがあるか、と問いかけた。
 - (2) これに対して子路が、まだ聞き及びません、と答えると、孔子は、^{すわ}坐るがよい。私なんじに話してやろう、と言って、下の事を教えた。
 - (3) 仁を好むことは極めてよいことではあるが、もしその人が、仁を好むと共に学問を好むことをしないと、ややもすれば、愚の弊に陥り、人におとし入れられ、人に欺かれる憂いがある。
 - (4) 知を好んでそれと共に学を好むことをしないと、ややもすれば、行いに^し締まりがなく、ただ徒らに^{いたず}高きに馳せ、広きを喜ぶ弊に陥る。
 - (5) 信を好んで学を好まない、条理を^{わかま}弁えずに物事をやり通そうとする結果、かえって物事を傷り害う弊害に陥る。
 - (6) 直を好んで学を好まない、人を責めるに急なる余り、狭くてゆとりのない、窮屈な弊害に陥る。
 - (7) 勇を好んで学を好まない、徒らに人に加える方面にのみ働くから、その末は叛乱をすら起すに至る弊害に陥る。
 - (8) 剛を好んで学を好まない、落ち着きを失って、徒らに力を振り廻わす狂者の弊害に陥るものである。
 - (9) 要するに、六者は美徳ではあるが、その美徳を全くするためには、広い見識を立てるための学問が必要であることを教えたものである。

P413

2. 人として避けるべきこととは

- (1) 子貢が、君子といえば、博愛の人であり仁慈の人であるが、この君子においても何人かを悪むということがありまじょうか、と質問した。
- (2) これに対して孔子は、もちろん君子といえども悪む者がある。
- (3) まず人の欠点を口に唱え世間に言いふらす者をにくむ。
(仁厚の心がないからである。)
- (4) 又、自分が下級の地位にいながら、自分よりも上級の地位にある者の悪口を言う者をにくむ。
(忠敬の心がないからである。)

- (5) 又勇氣はあるが礼節を知らず、むしろ礼なきを以て勇の本質と考える者をにくむ。
(ついには叛乱をなすに至るからである。)
- (6) 又、事を行うに決断があつて素早い^{すばや}が、しかも物事の条理に通ぜず、理路の塞がる^{ふさ}者をにくむ。
(是非善悪を選ばず、ただがむしやりに物事をやり通そうとするからである。)
- (7) と答え、更に語を続けて、以上は私のにくむところであるが、なんじ(賜は子貢の名)にもにくむ者があるか、と反問した。
- (8) そこで子貢は、私はまず、他人の考えを^{あらかじ}予め推量し、人のなす事、言う事の先くぐりをして、それで知者であるかの如き顔をしている者をにくみます。
- (9) 又、自分自身は不遜傲慢^{ふそんごうまん}でありながら、それを以て勇者と心得ている者をにくみます。
- (10) 次に他人の^{いんし}隠私(人に隠している私事)を摘発しあばき立てて、それを以て正直らしくみずから任じている者をにくみます、と答えた。
- (11) 君子はもとより、能く人を好し、能く人を悪む^{にく}者であるから(里仁、三)、その悪むところのあるのは当然であろう。

P429

[コメント]

「大漢和辞典」の編者、諸橋轍次先生の「論語の講義」。まるで諸橋先生の論語各章の講義を聴講しているように感じられる名著。ゆっくりと味わいたい。

— 2012年10月18日 林 明夫記 —